

テキスト 出エジプト記 7章8～24節

神はイスラエル救出のためモーセとアロンを派遣され、この二人の働きによって神の御業が世に媒介される。出エジプトの出来事では、イスラエルの解放という事態を通して救いの神が啓示されるが、その一方で神の裁きに立ち向かう人間の滅び行く様をも描き出す。全体として、救いの神と救われるべき罪人の姿が告げられることによって、人類全体へ救いが呼びかけられている。

イスラエルの解放は単にエジプトから砂漠へと放り出されることではない。聖書はそれを「自由である」とは言わない。神の代理人としてモーセがファラオに要求するのは、「わたしの民を去らせ、荒野野でわたしに仕えさせよ」というものである(7:16)。イスラエルの自由は、神に仕える、すなわち礼拝することの中に保証される。奴隷から自由民へという社会的立場の変化には、罪の束縛から神の自由への解放という福音が込められている。その意味で、出エジプトの出来事はイエス・キリストの十字架による罪の贖いを予め示す。

十の災いによってふるわれるエジプトは、創造者である神が救済者として働かれることによって、実際に不信仰が打ち壊されて行く過程をも示す。モーセとアロンの一見絶望的な闘いは、神がご自身の闘いとしてこれを行われることで、確実に救いへと導かれる。それはエジプトの神とイスラエルの神との闘いとして描かれており、エジプトの偶像に対して創造者である真の神が裁きの力を発揮され、ご自身の唯一であることを証しされる。

アロンの杖が蛇に変わって見せることで神の奇跡的な力が示されるが、これはエジプトの魔術師たちも同様に行うことができ、実害のない不思議というものが信仰の問題にとっては効果を生まないことの事例となっている。アロンの杖が魔術師たちの杖を飲み込んだことはその後の行く末を暗示する。

第一の災害は、ナイル川だけが血に変わったの

かエジプト中のあらゆる水が血に変わったのが本文が錯綜するが、エジプト全体が受ける被害は甚大なものと予想される。一つにはエジプト全土を襲う濁水であり、もう一つはエジプトを支える漁業の受ける打撃である。さらには酷い臭いが立ちこめるといった不快な状況も加わる。これに対し、ファラオはモーセを無視したばかりではなく、民衆の苦しみにも目を留めていない。

ナイル川の水が血に変わるという災害には、続く蛙の災いと併せて幾つかの象徴的な意味がある。これらの災いはファラオがイスラエルに行った「嬰兒殺し」に対する報復を意味する。「生まれた男の子は一人残らずナイル川に放り込め」(1:22)と命じたファラオに対して、殺された子供たちの血がナイル川から訴える。蛙はエジプトの豊饒を支える女神であり、安産の神であった。ナイル川と蛙というエジプトの神々は、こうして今やエジプトに災いをもたらすものとなった。これらの災いはエジプトの自然崇拜を逆手にとり、イスラエルの神がそれらの創造者であることを知らせるものである。

神はエジプトを滅びに定められたとは記されていない。エジプトは、自分の国のただ中で悲惨な状態に置かれているイスラエルに目を留めるよう求められている。彼らを奴隷の状態に留めておくのは不当である、と訴えられている。そして物言わぬ偶像にではなく、イスラエルを真の信仰の内に解放しようとされている神の御業に目を留めることが求められる。その神の真実を悟るのならば、彼らも間違いなく、神の憐れみを受けることになる。ヨセフの時代がその前例となる。そこには危機の中にあっても平安でいられた、神の知恵が支配する時代があった。エジプトにもまた立ち返る場所が用意されている。人間の頑なさは人間の説得力ではなく、歴史を導く神の御業が打ち壊す。神は世を滅ぼすお方ではなく、滅び行く世界を救おうとされるお方である。(牧野信成)

テキスト 出エジプト記 7章8～24節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問14

### 〔単元のねらい〕

テキストは7章前半であるが、単元の主題に基づいて、12章までを取り扱う。『子どもカテキズム』問14に「神さまより大きく強いものはないからです」とある。主なる神は、ファラオの高ぶりを裁くことをとおして、イスラエルの民を神信頼へと招かれた。わたしたちも主なる神に期待することができる。主イエス・キリストを贖いの小羊として与えてくださった神こそ、わたしたちの力である。

## 「神さまに希望がある」

エジプトで、イスラエルの人たちは苦しんでいました。奴隷にされて、朝から晩まで土をこねて、レンガを作らなければなりません。逃げ出した人もいました。けれども、エジプトの兵士たちが見張っていました。逃げ出した人は捕まえられて、もっと苦しい目にあわされました。

そんなイスラエルの人たちのところに、モーセが現れました。モーセは言いました。「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、イスラエルの民の神さまが現れて、『イスラエルの人びとをエジプトから導き出す』と告げられた」。モーセの兄であるアロンも一緒になって、神さまが現れてくださったと語りました。イスラエルの人たちは、神さまと一緒にいてくださるならば、エジプトから出て行くことができるかもしれない、苦しみから逃れることができるかもしれない、そう思い、神さまを信じて、神さまに期待しました。

けれども、その期待は裏切られました。モーセとアロンがエジプトの王さま、ファラオのところに行って、言いました。「イスラエルの神、主がこう言われました。『わたしの民を去らせて、荒れ野でわたしのために祭りを行わせなさい』(5:1)。ところが、ファラオは、モーセとアロンの言うことを聞かず、イスラエルの神さまのことを認めませんでした。ファラオはとても傲慢だったのです。イスラエルの神を認めませんでした。また、イスラエルの人たちはよく働いたので、エジプトにとって、イスラエルの人たちが出て行く

などどんでもないことだったのです。ファラオは、イスラエルの人たちをもっと苦しめることにしました。「レンガを作る材料を集めることから始めなさい。できるレンガの量は変えてはならない」。そう言って仕事を増やしました。イスラエルの人たちは、イスラエルの神さまよりもエジプトのファラオのほうが強いのか。神さまの力はそんなものか。そんなふうに思ったかもしれません。

みんなは神さまが生きて働いておられることを信じていますか。神さまが力強いお方であることを知っていますか。まことの神さまは、神さまを認めなかった傲慢なファラオを裁き、また、イスラエルの人たちに、ご自身が力あるまことの神であることをお示しくださいました。そのために、とても大きなみわざを行ってくださいました。

神さまはモーセを励まして言いました。「今や、あなたは、わたしがファラオにすることを見るであろう。わたしの強い手によって、ファラオはついに彼らを去らせる。わたしの強い手によって、ついに彼らを国から追い出すようになる」(6:1)。神さまは、イスラエルの人びとがお願いしてエジプトから出て行くのではなくて、逆にエジプトのファラオがイスラエルの人たちに出て行ってほしいと願うようになるだろうと約束されました。

神さまから励まされ、力を与えられて、モーセはファラオの前で次々と不思議なことを行いました。まず最初に、アロンが自分の杖をファラオの

前に投げると、杖が蛇になりました。けれども、ファラオはイスラエルの神さまを認めませんでした。そのため、神さまは全部で十の災いを与えられました。一つめの災いは、ナイル川の水が血に変わりました。モーセが杖でナイル川の水を打つと、水が真っ赤な血に変わり、ついには川だけでなく、池や水たまりの水まで血に変わりました。飲み水がなくなってたいへんなことになりましたが、けれども、ファラオはイスラエルの人たちがエジプトを出て行くことを認めませんでした。

二つめは、エジプトを蛙が襲う災いでした。神さまはエジプト中に蛙を送り込み、蛙は家の中はもちろん、ファラオのベッドにまで入り込みました。ファラオは言いました。「主に祈願して、蛙がわたしとわたしの民のもとから退くようにしてもらいたい。そうすれば、民を去らせ、主に犠牲をささげよう」。けれども、蛙が死に絶え、災いが過ぎ去ると、ファラオは心を変えて、イスラエルの人たちを去らせませんでした。

第三はぶよが送り込まれました。第四はあぶが送り込まれました。ぶよやあぶは人や家畜を襲って体を刺します。けれども、ファラオはイスラエルの人たちを去らせませんでした。五つめは疫病がはやり、六つめははれ物の災いでした。エジプトの国中の人々が病気に襲われ、けれども、イスラエルの人たちは病気になりませんでした。第七は雹が降るといふ災いです。雹が降って野原にいた家畜や畑の穀物がすべてダメになってしまいました。第八はいなごの大軍が飛んできて、畑に残っていた穀物や緑をすべて食い尽くしていききました。そのたびに、ファラオは、口では「イスラエルの民を去らせよう」と言いますが、災いが過ぎ去ると、「いや、去らせはしない」と言いました。約束を守らず、イスラエルの神さまが生きておられるお方であることを認めません。

ついに神さまは、エジプトの国中を暗くされました。暗闇で覆われたのです。第九の災いです。暗闇とはもはや希望がないということです。エジ

プトには希望が残されていないと示されました。神さまが共におられることに希望があります。

第十の災い、最後の災いがエジプトに行われます。神さまは、イスラエルの人たちに、小羊の血を家の門に塗り、その小羊の肉を焼いて食べるよう命じられました。その塗られた血を御覧になって、過ぎ越されるとおっしゃるのです。その夜、エジプトの国中で悲しくつらいことが起こりました。人であれ家畜であれ、その最初の子が撃たれて、命を失いました。エジプトの国中に泣き叫ぶ声が満ちました。けれども、小羊の血を門に塗ったイスラエルの人たちは守られたのです。

ついにファラオは、「イスラエルの人たちがこのままエジプトにいと、かえって災いばかり起きて、エジプトは滅びてしまう」と思い、出て行ってほしいと願うようになりました。神さまがエジプトに対して憤っておられることを認め、モーセを呼び出して言いました。「さあ、わたしの民の中から出て行くがよい。行って、主に仕えるがよい。そして、わたしのために祝福を祈ってほしい」。こうして、ファラオとエジプトの人々は、イスラエルの人たちをせき立てて、エジプトから追い出しました。お願いされて出て行くのですから、家畜などを連れて行くのはもちろん、衣服や金銀の装飾品などもいただいて、イスラエルの人たちは用意を整えて旅立ちました(12:31~36)。

神さまは、神さまを認めず、人々を苦しめる、傲慢な人を裁かれます。また、イスラエルの人たちは、その神さまの力強いみわざを見て、神さまへの信頼を取り戻しました。神さまに期待して歩む民とされて、荒れ野に旅立ちました。神さまは、神さまを信じる民を災いから守り、救い出してくださるお方です。今もイエスさまに結ばれて、神さまを信じて生きる者と共にいてくださるお方です。たとえ災いがあっても、神さまに依り頼む人に神さまの守りが確かです。神さまに期待して、歩みましょう。(望月 信)

---

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記 7章5節

わたしがエジプトに対して手を伸ばし、イスラエルの人びとをそのなか導き出すとき、  
エジプト人は、わたしが主であることを知るようになる。

---

## 〈ねらい〉

必要なものはすべて神さまが用意してくださるから、大胆に神さまのとお話できるようなって欲しい。

## 〈暗唱聖句〉

「わたしの強い手によって、王は必ずイスラエルを去らせることになる」。

## 〈展開例〉

- ①モーセさんは神さまの言われたとおり、王さまの前にたち、勇気を振りしぼって言いました。「イスラエルの神、主がこう言われます。『わたしの民をエジプトから去らせなさい』」。しかし王さまは「わたしは主など知らないし、イスラエルをさらせはしない」と、聞こうともしません。モーセさんたちはがっかりして退出しました。
- ②しかし神さまはモーセさん言いました。「わたしの強い手によって、王は必ずイスラエルを去らせることになる」。モーセさんは神さまの言葉を信じました。
- ③神さまは言われました。「王の心はかたくて民を去らせない。アロンに言って、杖でナイル川を打ちなさい。そうすれば水は血に変わる」。アロンは言われたとおりに行いました。川の水はことごとく血に変わり、悪臭を放ち、誰も水を飲めなくなりました。しかし、王はこのことを心に留めませんでした。
- ④次に神さまはモーセに言われました。「国中の水の上に手を伸ばしなさい。そうすればかえるを這い上がらせる」。アロンは言われたとおりに行いました。あらゆる水からかえるが這い上がってきて、国中を覆いました。王さまは困って、モーセに「明日イスラエルの人を去らせる」と約束しました。でも、次の日になると心をかたくしてイスラエル人を去らせませんでした。
- ⑤神さまは言われました。「杖で土の塵を打ち、

ぶよにしなさい。」アロンはそのとおりにしました。しかし王は彼らの言うことを聞きませんでした。

- ⑥神さまは次々に災いを起こされて、王にイスラエル人を去らせるように迫りました。モーセさんとアロンさんは神さまの言うとおりに王に話し、また行いました。しかし王の心はかたくなくて、神さまの言葉を聞き入れませんでした。
- ⑦そして最後の10番目の災いのとき、神さまは言われました。「私はエジプト中の人も家畜もすべて、はじめの子供を打つ。イスラエルの人々は、小羊の血をその家の門の柱とかもいに塗りなさい。そうすればわたしはその家の前を通り過ぎて打つことはない。この災いの後、王はイスラエルをエジプトから去らせる」。モーセは王に伝えましたが、王の心はかたくなくて、イスラエルの人たちを去らせませんでした。
- ⑧その夜、神さまの言われたとおりのことが起きました。国中の初めの子どもが打たれたのです。王さまはやっと神さまの強い手が分かり、エジプトからイスラエル人を去らせることを決心しました。
- ⑨こうして、神さまの強い手によって、イスラエルの人たちは奴隷の苦しみから解放され、モーセに率いられてエジプトから出て行くことになりました。そしてこれからも神さまの手の中で旅を続けていくことになります。

## 〈お祈り〉

力強い手を持って、イスラエルの人たちを守り救ってくださった神さま。あなたはどんなことをしてでも、助けを求める人たちをお救いになる方です。どうか私たちも、あなたの手の中で守ってください。王さまのように、心をかたくなくて災いを与えられませんか。アーメン。



**〈ねらい〉**

生きて働いておられる、神様のお守りの確かさに信頼する。

**〈はじめに〉**

9月も最後の週を迎えました。季節の変わり目は子どもたちにとって、体調を崩しやすかったりします。お休みが続いている子どもはいないでしょうか。どういう風にコンタクトをとるのがその子どもにとって、その家庭にとって相応しいのか、案じることも多々あります。いろいろと教師間で相談しながら、相応しいフォローを祈りながら続けましょう。

**〈御言葉に聴きましょう〉**

- ①神様は、誰と誰にお話をされましたか。
- ②杖は、何に変わりましたか。
- ③ファラオは、モーセとアロンの言うことをききましたか。

**〈展開例〉**

神様から大きなお仕事を与えられたモーセにはアロンというお兄さんがいました。モーセとアロンで、神様との約束「エジプトからイスラエル人を救い出す」という仕事を始めました。

でも、この国の王様ファラオは、全く言うことを聞きません。そこで、神様はエジプトの国に不思議な「十」の出来事、喜ぶことではなく、災いを次から次に起こしました。

一つ目。アロンがファラオの目の前で、杖を振り上げ、ナイル川の水を打つと、川の水が、全部、血に変わってしまいました。家で使う水も血になってしまいました。国中血のにおいで一杯になりました。でも王様は言うことを聞きません。二つ目。川から蛙があふれてきました。国中蛙で一杯になりました。王様は言うことを聞くから蛙をなくして欲しいとお願いすると、モーセは神様に祈って蛙は全部死んでしまいました。蛙がいなくなるとファラオの心は変わってしまい、約束は守りませんでした。三つ目。土の塵が全部、ぶよに変わ

り、四つ目。あぶで一杯になって国は荒れ果てました。五つ目。動物の病気がはやりました。家畜は全部死んでしまいました。六つ目。エジプト人と家畜は、うみのある腫れものができました。七つ目。雷がなって、大きなひょうが降りました。外にいた人はみんなひょうに当たって死んでしまい、畑のものも全部死んでしまいました。八つ目。いなごの大群がやってきて残っていた作物を全部食べてしまいました。九つ目。エジプト中、三日間真っ暗になりました。こうして、エジプトの国は次から次に恐ろしい災いがくだりましたが、残念なことに王様は全然、モーセとアロンの言う「イスラエル人をエジプトの国から出してください」ということを聞き入れませんでした。

そして、どうとう、十番目の災いが起こります。それは、一番恐ろしいものでした。「エジプト中の、全ての長男が、みんな死んでしまいます」というものでした。王様の長男も死んでしまうというものです。この災いからイスラエル人の子どもは助かるように、特別なことができました。それは、家の入口の柱に、子羊の血を塗るということでした。その血を塗っている家の子どもは殺されませんでした。神様が言われたとおり、国中の長男が死にました。王様の長男も死にました。これ以上の悲しみはありません。やっどやっど、王様の心は変わり、イスラエル人をエジプトから出て行くことができました。

長い間、本当に長い間待った、神様からのお約束、イスラエル人を救い出すというお約束は、本当になりました。たくさんイスラエル人は苦しい仕事から、苦しい生活から離れることができました。皆どんな気持ちだったでしょう。モーセのあとについて、たくさんの人たちが家族やお引越しの荷物も持って歩き出しました。神様は、その長い列を、昼は雲の柱、夜は火の柱で、みんなを守ってくださいました。

**〈お祈り〉**

神様、神様の言うことを信じ守り続けることができますように。

## 〈ねらい①〉

まことの神のご意志に対してどこまでも反抗する罪人のかたくなさと、それをいつでも凌駕することができる神の力強さを伝える（子どもカテキズム問14「神さまより大きく強いものはないからです」）。同時に、そのような力強い神が、その力を捨てるという十字架の愚かさによって人を救いに招かれるという、愛の圧倒にとともに驚く。

## 〈展開例①〉

今日のお話では、これでもかこれでもかと、神様が驚くべき出来事を起こされました（紙芝居など用いて、子どもたちのイメージをふくらませていただければと願います。）でもファラオはどこまでもかたくなでしたね。「もう参った、やめてくれ」と言いながら、神様が手を緩めると「やっぱり嫌だ、神の言うことなんか聞くものか!!」って、駄々っ子みたいに繰り返しました。バカだなあって思うけど、でもこれが人間なんだと聖書は教えてくれています。私たちも、いつも同じことをしているのです。

神様は、そんなファラオのことを、手のひらで転がすようにしてあしらわれましたね。ファラオがそうやって「やっぱり嫌だ」って言い出すことも全部分かっておられて、そんな反抗には決して屈しないで、どこまでも力で圧倒されます。ついには、「本当に今度こそ参りました」と言わせて、イスラエルの人たちが出て行くようにとファラオにお願いさせてしまった。

北風と太陽の話は知っていますか。旅人のコートを脱がせようと、北風が必死に吹きつけても、旅人は絶対に脱ごうとしなかった。同じように、ファラオも絶対に神様の言うことを聞こうとしなかった。でも北風にはできなかったことも、神様にはできるのです。どこまでもかたくななファラオのコートを、ついに脱がせてしまう、そういう圧倒的な力を神様は持っておられるのです。すご

いね。

そんな神様の力によれば、今世界中の罪人（私たちを含めて）に何千、何万の災いを与えて、神様の言うことをムリヤリ聞かせることだって、本当はできるのです。でも神様はそうはされなかったことを覚えましょう。神様は、どこまでも反抗する私たちの罪を罰する代わりに、イエス様を身代わりの犠牲としてくださいました。そういう大きな愛が、私たちのかたくなさをすっぱり覆っています。太陽よりも暖かい愛が、私たちに注がれているのです。

## 〈ねらい②〉

このような「奇跡」を信仰の目によっていかにしてとらえるか、共に考える。

## 〈展開例②〉

こういう10の災いの奇跡を読んで、おとぎ話みたいだなと思った人もいると思う。正直でよい。教会には「違うよ、おとぎ話なんかじゃない、本当にあったんだ」と証明したくて、科学的に説明しようとする人もいっぱいいます。最近では、この一連の出来事は、紀元前1500年ごろにあったサントリーニ島の大爆発からすべて説明できるなんて仮説もあるね。（インターネットで「エジプト サントリーニ島」と検索すると色々出てきます）。

でも、本当に大事なものは、それは全部「神様が神の民のために起こしてくださった救い」だと信じていることです。神様は、科学で説明できるようなことも、説明できない超自然的なことも全部用いて、私たちのために「救い」を与えてくださいます。そのためなら、神様はどんなことでもしてくださいます。そして、そういう神様の力が働いている出来事は、どんなありふれたことであっても「奇跡」なのです。



## 〈ねらい〉

力強い業で私たちに信頼を起こし、この信頼に応えて災いから守ってくださる神様を覚える。

## 〈展開例〉

①今日は、神様が不思議な10の災いを起こされて、エジプトの王ファラオにイスラエルの解放を認めさせたお話。先週、モーセがイスラエルの人たちに神様の約束への信頼を呼び起こした話を聞いた。そしてモーセは、エジプトで奴隷であったイスラエルを解放へ導くため、王のもとへ行く。しかし、王はそれを頑なに拒否する。王は、神様の使いであるモーセとやりあおうとする。つまり、王は神様と勝負しようとした。当時の世界の頂点に君臨する神様を認めない国エジプトの代表として、王は神様に歯向かう。神様は自分を神とやりあえると勘違いするこのファラオに、本当の世界の支配者の力をまざまざと知らされる。このため、エジプトには国中を混乱させる災いが10度におよび引き起こされる。そしてついにファラオは神様の力に屈服して、イスラエルの解放を口にした。

②神様はエジプトに災害を引き起こされたがイスラエルの人々は守られた。神様はモーセの言葉を信じ、神様に信頼した者たちを確かに守られ、その約束を果たされたのである。イスラエル人はエジプトに引き起こされる神様の力の大きさを見るたびに神様を畏れたことだろう。また、そこから守られるたびに神様への信頼を強められたことだろう。

③私たちは違う時代を生活しているが、今日の話は人ごとではない。私たちの日常にも神様と、神様と敵対する者との戦いは身近なことである。ひとつは、君が神様に従うために、その邪魔を

する具体的な障害があるかもしれない。人間関係、社会の仕組み、世の中の考え方。神様と敵対者の戦いは君の周りに確かにあるだろう。また、君の内側、神様に逆らうファラオと神様に従おうとする戦いは君の心の中でも度々引き起こされるのではないだろうか？

④皆はこうした戦いの中で、ときに敵対者の力に怯むかもしれない。今日の話の中で勝利のカギは神様に信頼を置くということであった。しかし、この信頼はどうやったら得られるのだろうか？ 私たちは口先だけの人間を信じることは難しい。反対に言葉数が少なくても、言ったことをやり遂げる人の言葉には、私たちを信じさせる力がある。皆が神様を信じられるかどうか、それは相手が信じるに足るか？ということにすべてがかかっている。

⑤今日の話は、神様は御自分が神であるということをしかりと現わして下さる方であることを伝えている。神様は自分の力も隠したままではおられない。神様は、本当に御自分が神であるということを私たちに示し、私たちの信頼を勝ち取って下さるのである。そして、そんな神様を信頼する者を神様は裏切られずに守って下さる。神様は御自分が大切にしている人を助けられるし、神様は御自分のことを大切にする人を助けたいと思われる。君は、神様がその独り子を与えるほどに神様にとって大切な人である。だから、君もまたいつも神様を大切にする人として歩んでほしい。そんな君を神様はさらに大切に保護して守って下さるからだ。

## 〈祈り〉

愛する者に信頼を呼び起こし、さらに愛して下さるあなたに感謝します。アーメン。

